

# 八〇年代のロシア文学主潮

松本忠司

- 一、人民主義運動
- 二、小市民文学
- 三、革命的民主主義文学
- 四、トルストイ主義をめぐつて

ロシア史上十九世紀八〇年代は「沈滞期」という性格規定が通例となっている。

一八八一年三月一日、皇帝アレクサンドル二世はペテルブルグ市街を馬車で通行中、「人民の意志」派のテロリストの爆弾で落命した。このときから反動は攻勢に移つた。強硬な保守派の指導者ポベドノスツェフを迎えた新帝アレクサンドル三世の政府は、ロシア全土に弾圧の規律を布いた。政府は極端な国粹主義をもつて臨み、政治的改良を望む一切の思想を、もつとも穩健な自由主義をも含めて徹底的に弾圧し、「祖国の記録」、「事業」ほか一連の雑誌・新聞を発禁もしくは押収した。「生粋のロシア人、正教を奉ずる支配者」と呼ばれるのを好んだアレクサンドル三世は、帝国を構成する諸民族の強制的ロシア化を断行した。民族語の使用禁止、非スラヴ民族の正教への改宗強制、政府の公然たる指導によるユダヤ人大虐殺などが行われた。

八〇年代のロシア文学主潮

つかの間の「勝利」がもたらした「人民の意志」派の決定的な敗北は、知識人全般に幻滅を感じさせた。倦怠と無力が教育ある社会にひろまった。知識人の一部は政治的改革、とりわけ暴力による政体改変に信念を失つたため、道徳再生と無抵抗の教義に走った。また一部は、広い社会活動と切り離された「小さい事業」に閉じこもり、さらに大多数は英雄主義と犠牲に失望して、まったく諦めと従順の態度をとった。

アレクサンドル・ブロークという言葉はこの時代の雰囲気をよくつたえている。

永いうつろな時代に

心のうちに睡眠と烟霧がいやまさる

ホベドノスツエラ  
勝利者はロシアの空を

梟の翼でおおている

昼もなく 夜もなく

ただ巨きな翼のかげのみ……

人民派の運動の成否は七、八〇年代の知識人層の希望であり、絶望であつた。それは政治面のみならず、当時の文学運動にも深く関り合つていた。人民主義の幻想とイデオロギーを分つことのできなかつた人はいても、人民主義の気分にあつた無縁だつた人はいなかつた。八〇年代の文学の時代的背景を理解するために、まず人民主義の運動の過程を眺めてみよう。

人民主義運動は、「農奴解放」の進歩的よそおいが剝ぎとられた六〇年代末期から七〇年代にかけて胚胎した。そ

れはまず、地主の農民に対する農奴制的圧迫の残滓に向けられた抗議の表われであつたが、まもなく徹底的「農奴解放」、すなわち専制打倒の運動に発展した。

人民主義理論の土台は、バクーニン、ラヴロフ、トカチョーフの三人によつて作られ、おのおのが異なる方向の戦術の問題と運動の計画を樹てた。もつとも多数の同志をもつたバークニン派は、もつばら農民暴動に期待をかけ、ラヴロフ派は平和的手段による農民啓蒙に限定し、トカチョーフ派は「革命的な少数」のインテリゲンツィヤの独裁という空想的計画を樹てた。しかし、この三派も理論的根拠においては一致していた。その哲学的根拠は、ユートピア的な、いわゆる「農民社会主義」と独特な形で結合した主観的イデアリズム、およびその産物としての主観的方法である。社会機構交代の客観的合法則性を否定し、社会発達の経済的諸法則を理解することなく、人民派は、ロシアの資本主義が「偶然的な」現象であつて、発達しないであろうと確信した。それゆゑ、彼らは農村共同体（オープシチナ）の保存と強化によつて、資本主義の発達を阻止しようと望んだ。農村共同体こそ社会主義の胎児であり基礎である、と彼らは見ていた。したがつて、共同体の改造におけるプロレタリアートの役割を否定し、ロシアではプロレタリアートは発達しないと考へた。農民を協同組合的「共産主義意識」の保持者として扱い、専制との闘争における主要な革命勢力とする幻想をもつた。しかも人民派は、農民を知らず理解しなかつた。なぜなら、彼らは農村に滲透しつゝあつた商業資本的関係の成長に目をふさぎ、農民の階級的分化の過程に注意を向けなかつたからだ。人民派の主観的ソツィオロギイは、社会発達の推進力として、いわゆる「批判的に思索する個人」（ラヴロフ）、あたかも自分のイデアと意志によつて社会の方向を規定し、歴史を動かす、受動的な「群集」、人民および諸階層を導く力をもつた「英雄」を提起した。国家の超階級的性格の理論もまた、彼らの混乱と観念性を明らかに示している。人民主義者はみづからを「社会主義者」と呼んでいたが、科学的社會主義との共通性は認めがたい。この傾向の流派

は、根本的な思想において、五〇〜六〇年代の革命的民主主義（ベリーンスキイ、チェルヌィシエーフスキイ、ドブローリネフ）に比べて、一步後退とみななければならない。

理論的には多くの誤謬を含んでいたとはいえ、七〇年代の人民主義は疑いなく、民主主義の基盤に立ち、直接的な解放闘争の推進者であつた。農民の社会革命化とそれのインテリゲンツィヤによる指導の不可欠性というバクーニンのイデオロギイは、当時の革命的気分を持つた知識青年層を奮い立たせ、「人民の中へ」の運動となつて燃え上つた。大学をとび出し、家庭を捨てて、青年たちは農民の衣服をまとい、ヴォルガ、ドン、ドニエプルの流域地帯に入つて、農民に対する宣伝活動を始めた。しかし、農民の階級的本性を理解せず、組織も理論もたぬ人民派青年は、沈黙と無関心によつて農民に迎えられた。一八七四年の末には、千人を超える革命家が検挙され、第一次人民派運動は失敗に終つた。

個人的な「人民の中へ」の運動の失敗にかんがみ、一八七六年、ペテルブルグで「土地と自由」党が組織された。ここでは農民蜂起のための不断の活動を行うべく、インテリゲンツィヤの長期的農村滞在が定められた。しかし活動の困難さを知り、大衆の革命的主動性に不信を抱き始めた人民派は、圧制者との闘争から勤労大衆の注意をそらす、誤つた個人的テロルの戦術に転じ、ツァーリズムとの「一騎打ち」をめざした。かくして、「英雄」と「群集」の理論における主観的イデオリズムは、実践的には、政治的冒険主義を導き出した。

テロルに対する意見の衝突が原因となつて、一八七九年、「土地と自由」党は二つの組織に分裂した。一方は「黒い再分割」派で、プレハーノフ、アクセリロード、アプテクマン、ザスーリッチその他であり、もう一方は「人民の意志」派で、アンドレイ・ジエリャエフ、アレクサンドル・ミハイロフ、フロレンコおよび婦人革命家のフィゲネルとペローフスカヤが中心となつた。「黒い再分割」派は以前のままの見解に留まつたが、一部は（プレハーノフなど）

人民主義と訣別し、マルクス主義の学説に従い、一八八三年、「労働解放」団を創設した。一方、「人民の意志」派は急速な政治的変革をその目的とし、テロル行為を組織の基本的方向に定め、活潑な地下活動を展開した。七九年八月、執行委員会は皇帝アレクサンドル二世の死刑を公布し、この時らしい、組織をあげて一つの目標——皇帝の「清算」——実現のため努力した。その結果が三月事件であつた。

皇帝の「清算」は、革命家にとつて確かに一つの勝利ではあつたらう。しかしあまりに犠牲の大きい勝利であつた。暗殺によつては、彼らの希望は実現しなかつた。大衆は相変わらず奮いたたず、弾圧は倍加した。そして組織は破壊を招いた。中央委員会の三十六人の幹部のうち、ジェリヤーエフ、ソフィヤ・ペローフスカヤを含む五人が絞首刑に処せられ、一人は発狂し、十二人が獄死し、残りの者は（国外へ逃れた三人を除いて）シベリヤでの重労働を宣告された。

人民派運動は、三月事件後、急速に決定的崩壊と退化が始つた。人民主義のユートピア的な、土台そのものが欠陥である計画は、歴史的現実との接触に耐えうるはずがなかつたのだ。八〇年代の人民派は、革命的人民派の民主主義的性格を失い、闘争を拒否し、以前の言葉を口先でのみくり返しながら、自由主義的人民派（ニコライ・ミハイロフスキイ、クリヴェンコ、ユジャコフ、ヴォロンツォーフなど）に変質し、富農の利益の代弁者に転落する。

もちろん、人民派のすべてが一挙に革命性を失つたのではない。逮捕、処刑の危険を冒して、党を再建するさまざまな試みがなされ、一八八二年から八七年にかけて新しい陰謀やテロル行為が過激派の存在を証拠だてた。八七年、「人民の意志」派の残党——ルカーシエヴィチ、シチエヴィリョーフ、アレクサンドル・ウリヤノフ（レーニンの兄）の指導したグループが、アレクサンドル三世暗殺の計画を進めたが、全員が逮捕され、処刑された。この運動を最後に、その後の人民派の活動と理論は、ロシアにおけるマルクス主義の普及と解放運動の主要な思想的障壁である以外

のなにもでもなかつた。

人民派の理論は、七〇年代においてすでにマルクス、エンゲルスによつて批判された。<sup>(註)</sup>八〇年代には、プレハーノフと彼の「労働解放」団がこの闘いを展開した。プレハーノフは、なによりまず人民派の望むロシアの非資本主義的な「特別な道」の可能性を、根本から覆えした。ロシアの経済的発達を分析しながら、ロシアはすでに資本主義的発達の道を進んでおり、いかなる力もこれを変えることはできない、とプレハーノフは説く。革命家は、資本主義の発達が生み出す労働者階級に立脚しなければならぬ。革命家の任務はプロレタリアートの階級的意識を発達させ、彼に自分の労働者党をつくるよう助けることだ。農民はすでに階級分化が尖鋭となり、富農はブルジョアジーに、貧農は都市労働者に進化する。したがつて、人民派の革命における農民主体性論はまったく空虚な幻想にすぎない（『社会主義と政治闘争』、『我々の不一致』）。

(註) マルクス、エンゲルスは、バクレーニンの無政府主義について次のように述べた、——「経済条件でなく、意志が彼の社会革命の基盤だ」(マルクス、全集、I.15, CTP. 188)。「バクレーニンのものには、独自の理論——ブルードン主義と共産主義のごたまぜ——がある。しかも彼のブルードン主義のもつとも本質的なものは、除去しなければならぬ主要な悪とは資本ではない、したがつて、社会発達の結果発生した資本家と雇傭労働者との階級対立ではなく、国家である、と考へる点にある……バクレーニンは、国家が資本をつくり、資本家は国家のお情けによつてのみ自分の資本を操ると確信する。したがつて、国家が主要悪であるからには、なによりまず国家を根絶しなければならぬ、そのとき資本は自身で悪魔のところへすつ飛ぶだろう、と。」(エンゲルス、書簡集、CTP. 277)

プレハーノフの見解は正しかつた。工業の発達は、たえず増加する農民出のプロレタリアートを生んだ。七〇年代なかばには、早くも先進的労働者のグループが発生し(オデッサの「南ロシア労働者同盟」は七五年に、ペテルブル

グの「ロシア労働者北方同盟」は七八年に結成)、八〇年代全般にわたつて工場労働者のストライキが瀕発した。

かくて八〇年代の「沈滞期」、反動の勝利と人民派の終熄の時代に、支配者たちがロシアをおおいつくしたうわべの静けさを喜んでいた間に、デカブリスト以来のロシアの革命運動は、貴族||地主、雑階級||インテリゲンツィヤの二段階を終えて、プロレタリアートの段階——決定的な段階に移行しつつあつた。八〇年代はまた、五〇年代からつづく革命的民主主義文学と、衰頹しはじめた人民派文学の葛藤の時代であり、新しい道をもとめるロシア作家たちの苦悶の時代であつた。

## 二

マクシム・ゴーリキイは、全同盟ソヴェト作家大会において語つた。

「西欧におけると同様、わが国の文学も二つの方向に沿つて発達した。批判的リアリズムの方向はフォンヴィージン、グリボエードフ、ゴゴリ等からチェーホフ、プーニンにいたり、純町人的文学の方向はブルガーリン、マサイリスキイ、ゾートフ、ゴリーツィンスキイ、フセヴォロド・クレストーフスキイ、フセヴォロド・ソロヴィヨーフからレーキンおよびアウエルチェンコその他にいたる。」(全集、F. 27. CTP. 311)

ポペドノスツェフの鉄の鞭が進歩的出版に打ちおろされ、官製の雑誌・新聞が活潑に政府の宣伝をくり返していた八〇年代には、「沈滞」の表面的風潮に乗じて、後者のグループに属する作家たちが輩出した。彼らはロシア文学における革命的伝統に抗し、「過去の英雄的世代の理想主義」を排斥し、生活の「享楽」と「平静」を説き、「現実の名誉回復」と称して、当時の社会制度の是認を呼びかけた。文学のこのような傾向の擁護者として行動したのは、ガ

イデブーロフが主宰した「週間」のグループである。「週間」の八〇年代における変質ぶりは、人民派文学の思想的潮落の過程にとつて典型的である。

八〇年代までは、「週間」はロシア出版界の左翼に数えられていた。しかしそれは、七〇年代にすでに、ミハイロフスキイその他の「祖国の記録」に比べて、上層人民主義とでもいふべき特別な視점에立つていた。その視点は、当時大きな反響を招いた「ペ・チェ」(チュルヴィンスキイ)の論文のなかに、明らかに示されている。チュルヴィンスキイは、「農村」の道徳的性質をほとんど偶像崇拜的に讃仰し、それがインテリゲンツィヤの道徳的理念に優越するとし、農民の言葉と心理を移すことによつて文学が蘇生する、と説いた。「週間」編集グループはこの見解を完全に支持した。

農村の「優越性」の確信と、その「見解」および「声」に対する隷属の要求は、やがて八〇年代の反動期にそのまま反革命の宣伝の手段となつた。この時期の「週間」の中心的人物は評論家ユーゾフ(カーブリツの筆名)である。ユーゾフはかつて、「人民の中へ」の運動に参加し、革命運動に積極的活動を行つた「バクーニン主義者」だつた。八〇年代初頭、彼は「人民主義の基礎」を理論的に公式化し普及する目的で、一連の論文を書いた。しかし、ユーゾフの論文は、古い、戦闘的人民主義の不信な卑俗化にすぎなかつた。三月事件後、人民派の一部に起つた動揺は、やがてユーゾフの『ロシア社会生活における知識階級と民衆』(八五)の見解を決定する。この著作で彼は、解放闘争の伝統から遠く離れ去つた。

八〇年代後半、「週間」は人民派の革命的伝統のいかなる積極的要素をも失つた、ただのブルジョア新聞と化した。「週間」は「平静」の理論を説き、「現代に対する憐憫」をぶつくさと言語するだけであつた。この時期に「エル・デー」(ヂステールロ)の論文『新しい文学世代』(八八)が現われ、それが「週間」のマニフェストとなつた。ヂステー



ルロは書いた。

「新しい世代は懷疑論者として生まれた。彼の父や祖父が生きた理想は、もはや彼に対しては無力のものとなつた。彼は理想主義の色眼鏡をかけずに、現実の素顔をまともに見つめる。彼は月並な人間生活に憎悪も侮蔑も感じないし英雄であるに相違ない人間の義務を認めないし、理想的人間の可能性など信じはせぬ。」そして、新しい世代が認めるのは「そのなかに生きるよう定められている」現実のみであり、その「すべてを包含する絶対的権力を感知して、自然に復歸した」。新しい世代は、「生活におけるすべては、単一の根源——自然から流れ出たものであり、すべてがそれ自体として同一の存在をあらわすのであつて、自由な、芸術的な世界觀照にとつてはすべてが同様に美しい、という意識につらぬかれている。」（「週間」1883, No. 15）

「週間」のこの主張に対して、ニコライ・ミハイロフスキイとエヌ・シエルグーノフは激しく論駁した。——前者は人民派の正統の先進的立場から、後者は革命的民主主義の立場から。シエルグーノフは書いた、「エル・デー氏が述べていることすべては、仮装された文学的な言葉を使わないで、単純な、ありふれた言葉に替えると、こういうこととなる。——紳士諸君よ、なんの足しにもならない駄ぼらのイデヤはお捨てなさい。実用的な人間になりなさい。それぞれ自分のいちじくの傍に坐つて、自然を嘆賞するんですな。どうせ、なるようにしかなりやしませんよ。」

（作品集、T. III, CTP. 565）

しかし、ヂステールロの主張は、確信を失つた当時の知識人たちには歓迎された。彼のいう「新しい世代」としてヤシンスキイ、バランツェーヴィチ、シチエグロフ、詩人フォファーフ、デードロフ、チーホノフ、ルゴヴァーイが数えられた。ヂステールロは、チェーホフをも彼の影響下にある作家に数えようとした。しかし、チェーホフの全創作のモチーフが、「現実の否定でなく、現実の認知の精神」につらぬかれた作家グループと縁もゆかりもない

ことは明らかである。ヂステールロはまた、ナドソンとガルシンが彼の説に同調せず、コロレンコの「若干の」作品のなかに、過去の世代の「理想主義的志向」があるのを悲しんだ。

「新しい世代」の創作の主題は、もっぱら家庭・風俗の分野に限られていた。文芸創作よりも随筆的評論によつて知られたデードロフは、一切の生活上の原則と理念を排斥し、小市民的幸福の追求を唱えた。彼は「父と子」の問題を新たに提出し、個人生活の些末事にあくせくする八〇年代の「子」を称讃し、六〇年代の「理想」に生きる「父」を非難した。シチェグロフは、湯山客や別荘人の風俗に取材した短篇小説や喜劇を書いたが、その一つに「小さいことに満ち足りるものこそ讃えられよ！」と書き、ウラジミール・チーホノフは、彼の作品の主人公を通して、「まったくの話、人間が幸福になるのにたくさんのことが必要だろうか?! 温順であれば——それだけですべて足りるのだ。」と自分の見解を述べている。「温順であれ」という表現が、かつては人民派の知識人たちを憤激させたのであったが、八〇年後半には彼らの一般的気分になつていった。

(註) 「温順であれ」という言葉は、一八八〇年六月モスクワで行われた「プーシキン記念祭」におけるドストエーフスキイの講演に關係している。文豪のこの発言は当時、大争論を捲き起した。記念祭の挙行は当時の社会的昂揚と關係していたといつてよい。しかし、ドストエーフスキイは、当時のもつとも穏和なグループのなかでさえ優勢を占めていた変革の気分にかからず、ロシア生活の「呪わしい諸問題」の解決に当り、人民の真実にしたがい、温順によつて、社会改造への希求の拒絶によつて、もっぱら内面的自己完成によつてなすべきだと勧めた。これに対して人民意志派は「必要なのは温順でなく、抗議だ、反抗が必要だ」と主張した。

現実に対する積極的態度の喪失は、不可避免的にリアリズムの低下を招く。これらの作家の一部はリアリズムを放棄し、フランスの自然主義に逃避の場を求めた。代表的な例はボボルイキンである。ゴンクール兄弟とゾラに傾倒した彼

は、自分をゾラの実験小説の継承者と称し、小説をとおしてロシア現代史を書こうとした。知識人や新興ブルジョアジの種々相を描いた作品の幾つかで、彼は若干の成功は収めた。しかし同じ時期の西欧やアメリカの自然派と同様に、彼は心理的な洞察力と芸術性に欠き、いたずらに二義的な挿話や不必要な細部描写によつて主題がおおいかくされているその作品は、皮相的で平板すぎた。

興味本位の、軽い読物文学の氾濫もこの時代の一つの特徴であつた。イ・ポターペンコは、この分野の作家のうちでもつとも有名である。いわゆる「繊細な感情」と安っぽい楽天主義を売物にした彼の作品は、革命的意欲に対するあからさまな中傷にいろどられている。「英雄ならざる者」という象徴的な表題の中篇小説は、作者の「中ぐらいの人物」としての博愛主義が典型的に示されている。軽い読物・三文小説の類の作者たちのなかには、後にモスクワ芸術座の創立者となつたヴェ・ネミローヴィチダンチェンコのように、芸術の他の領域で大きな才能を發揮した人もないわけではないが、概して意欲にとぼしく、才能も貧弱であつた。

ルゴヴォイ、チーホフ、ビビコフ、シチェグロフその他——これら小市民文学の作者たちをひつくるめて、チーホフは「八〇年代人協同組合」と皮肉つた。彼らの作品には例外なく善良な俗物が登場し、微温的な小市民的幸福に酔い痴れながら、ときたま人生について感傷にふける、といった内容がくり返されるだけであつた。「英雄ならざる者」の無活動の弁明と慰めが、「協同組合」作家の共通する主題であつた。「現代は遠大な事業の時代ではない！」——これが小市民文学の合言葉であつた。

八〇年代の「沈滞」を代表する小市民文学は、「週聞」を中心に、御用新聞から自由主義的あるいは人民主義的出版にまで蔓延していた。しかしこれらの作家たちは、当時でも二流、三流で、その主人公たちの脊丈と等しく、急速に忘却の彼方へ追いやられてしまつた。もちろん、ゴリキイが次のように述べるとき、これら小市民作家を指してい

るのではない。「わが文学は——われわれの誇りである。民族としてのわれわれによつて創り上げられたすぐれたものである。そのなかには——われわれの哲学の一切がある。魂の偉大な衝動が銘記されてある。この素晴らしい、おとぎ話的速度で建てられた殿堂のなかでは、偉大な美と力の慧知が、神聖な純粹の心が——真の芸術家の慧知と良心とが今日にいたるもなおあかあかと燃えつづけている。」（全集、T. 25 CTP. 64）

八〇年代においても先進的文学は、公然と反動に対決し、革命的伝統を堅持していた。この時代にロシア文学の殿堂を飾る、時代の知性と良心の証拠<sup>あかし</sup>たりうる文学遺産は、シチュエグロフその他によつてではなく、サルツィコフ、シチュエードリン、グレープ・ウスペーンスキイ、レフ・トルストイ、ヴェ・ガルシン、チャーホフ、コロレンコらによつて築かれた。

三

六、七〇年代の巨匠たち——トルストイ、ドストエーフスキイ、ゴンチャロフ、ツルゲーネフ、レスコーフ、フエート——は革命的気分をもつインテリゲンツィヤと一線を画していたが、四人の傑出した文学者が左翼の知的指導者として、革命的民主主義文学を発達させた。批評におけるチェルヌィシエーフスキイとドブロリユーボフ、詩におけるネクラソフ、散文におけるサルツィコフ、シチュエードリンである。

革命的民主主義者の活動が文学ばかりでなく、ロシアの文化全般に及ぼした影響はきわめて大きかった。彼らは、文学を人民の精神教育の有力な武器と理解しつつ、文学発達の一般法則を明らかにし、芸術の歴史的起源と社会的使命とが芸術的方法に結びついた問題を究め、唯物論美学を創造した。彼らの美学的諸原理は傘下の作家・詩人はもち

ろん、その社会的政治的見解の点で革命的民主主義者に加担しなかつたツルゲーネフ、オストロフスキイ、ゴンチヤローフに強い影響を与えた。またトルストイの創作活動におけるネクラソフとチェルヌィシェフスキイの果たした役割も無視できない。

革命的民主主義文学の巨大な影響力にもかかわらず、八〇年代においては革命的文学伝統の旗幟はひとりサルツイコフシチェードリン（一八二六—一八九）の孤軍奮闘によつて辛うじて守り続けられているの觀があつた。ドブロリユーポフとネクラソフはすでに世を去り、チェルヌィシェフスキイは流刑と追放の彼方にあり、群小作家は滔々たる転向文学の濁流に呑みこまれていった。

七〇年代末期からシチェードリンは、ネクラソフとともに、自由主義的人民派の機関誌だつた「祖国の記録」を主宰し、この雑誌を革命的民主主義の方向に導いた。

八〇年代の「沈滞」のなかで、シチェードリンの諷刺の炎はいつそう激しく燃えたつた。官僚権力を攻撃する一方彼は「小さい事業」と「現実の名誉回復」を宣伝する脱落者たちを容赦なくたたき、この「新しい世代」の活動家たちが「限界の範囲内で、可能性に順応して」行動しつつかに変質してゆくかの過程を、正確に予測している。数多い『おとぎ話』には、支配者たちあらゆる色合をもつた脱落知識人の指導者たちの肖像が、みごとに描き出されている。治安維持の措置として一切の活字の破棄を命ずる「熊総督」（同名の諷刺短篇、以下同じ）、屈従と警察の恐怖の国で芸術の保護者と称する皇帝——「鷲の保護者」とならんで、平素は大言壮語しても警官が近づくと平身低頭する「自己犠牲的な兎」、法の枠内を「慎重に、ゆつくりと」行動して、支配者のカマスに呑みこまれるまで道義の高揚や改良の希望を説教する「理想主義的なヒラメ」が登場し、自由主義者の怯懼が存分に嘲笑されている。自由主義的知識人における革命家から帝制の被護者への転化の過程は、シチェードリンの予測に寸分の狂いもなく実現され

た。かつての人民崇拜者たちは、やがて人民におびえて叫んだ。「われわれは、政府が銃剣をもつて民衆の憤怒からわれわれを守護しつづつあることに対して、政府に感謝しなくてはならない。」<sup>(註)</sup>

(註)この言葉は、前出のゴリキイのソヴェト作家同盟第一回大会における演説から引用した。以下その前後の部分を含めて、記しておく。「……ピョートル・ストルーヴェは……一九〇一年、『フィヒテへの復帰』へと——小店主および地主どもによつて代表されている民族の意志への服従の思想へと呼びまねき、そして一九〇七年には彼の編集と参加のもとに評論集「ヴェーヒ」(道標)が発行され。そのなかには文字どおり次のようなことが声明されていた。

『われわれは、政府が銃剣をもつて民衆の憤怒からわれわれを守護しつづつあることに対して、政府に感謝しなくてはならない。』

これらの卑劣な言葉が民主主義的なインテリゲンツィヤによつて、地主の番頭たる大臣ストルイピンが毎日数十人の労働者と農民を絞首していた時代に語られたのである。そして評論集「ヴェーヒ」の根本的な意味は、七〇年代に語られた頑固な保主義者コンスタンチン・レオンチェフの『ロシアを凍らせなくてはならぬ』、すなわちロシアにおいて社会革命の火の一切の火花を踏み消してしまわなければならないという狂信的な思想の繰返しであつたのだ。「ヴェーヒ」——この「立憲民主党员」どもの裏切り声明書——を、古い裏切者レフ・チホミーロフは『ロシア魂の覚醒と良心の復活』と名づけて大いに称讃したのである。(全集、F.27. CTP. 316) ついでにいうと、レフ・チホミーロフは最初「人民の意志」派の革命運動に参加し、一八八二年に亡命。八九年、皇帝に赦免の請願書を出して帰国、その後は反動的な御用新聞になつていた「モスクワ報知」の編集者となつた。

革命の事業を放棄した「種々雑多な人々」について、シチュエードリンはこう書いた。「種々雑多な人々の特徴となつている共通の標識は、彼らが良心を失くしたところにある。そして良心とひきかえに、彼らの口のなかに二枚舌が生え伸びた。二枚とも嘘をつく、時には順番に、時には——これはいつそう恥ずべきことだ——二枚とも一緒に……その生活の流れのなかで彼らはすべてのものであつた、——針鼠の手袋の擁護者でも、西欧派でも、今日のいわゆる

「シシリヤ人」でもあつたのだ。しかし、どこにも自分の魂の一片すら残さなかつた。なぜなら、彼らには残し置くべきなものもなかつたからだ。彼らの芸術の一切は、いつでも、必要な機会にすばやく着替えしたり、化粧したりする態勢で待機するというところにある。」（全集、T. XVI. CTP. 400）シチュエードリンは、これら「種々雑多な」知識人は「口を開けば欺瞞」を語り、「なにか行動すれば裏切りと変節」を行う、と攻撃した。

シチュエードリンは、一貫して民衆の利益のために闘つた。しかし彼は人民派のように人民を偶像化しなかつた。彼のこの闘いは、正義と理性の問題であつて、感情的な恍惚とは無縁だつた。彼は大衆の後進性と無知をよく知つており、彼の諷刺はしばしば民衆の「奴隸的」忍耐に向けられた。——なぜ農民はつましく貧困を甘受するのか？なぜ一般のロシア人は圧迫され、搾取されることに平気でおれるのか？なぜ群衆は、大きな拳を握りしめた警官が些細な「法律違反者」の顎を打ち砕くとき、大声で笑うのか？シチュエードリンの「虐けられた人々」に対する憐憫には、彼らの消極性と勇氣の欠如を腹立たしく思う氣持が重つている。彼の諷刺は、専制の鞭で飼い馴らされた臆病な民衆に人間の尊嚴の觀念を目覚めさせ、農奴制度の残存物を根絶しようとするとき、とりわけ厳しく、侮蔑的なまでの鋭さがみられる。心から民衆を愛しその潜在力を正当に評価するがゆえに、彼は民衆に対して敵しい態度をとらざるを得なかつた。ゴリキイは書く、——「サルツィコフは知性に富み、誠実で、きびしかつた。彼はどんなつらいことでも、かならず真実を述べる。彼の創作の幅はきわめて広く、その笑いはまったくゴゴリの笑いとは別だ。彼の笑いは、はるかに大きく、真実であり、深く、力づよい。シチュエードリンを読むことなしに、十九世紀後半のロシア史を理解することはできない。」（ロシア文学史、CTP. 270）

人民主義者がロシアの非資本主義的發達を夢想していたとき、シチュエードリンは、資本主義の發達がロシアにおいても不可避の現象であることを見ていた。多くの作品で彼は、感傷的で無能なマニローフ型のふやけた「旦那衆」の

零落にとつてかわり、生活力の旺盛な新興の「成上り」資本家たちが生活の主人として登場し、いつそう強欲な掠奪への大進軍を開始していることを示している。資本主義の発達が避けられぬものであるなら、その搾取に抗しその犠牲となつている大衆を救い出すものは、資本主義とともに成長する勤労大衆自身以外にはない、とシチェードリンは考えた。かくて彼は、ロシア人の未来の「肯定的形象」の登場について夢見る。「文学は未来の法則を予見し、未来の人間の形象を表現するだろう」そのためには「彼らが身をひそめている暗黒のなかから」彼らを引き出し、「彼らが自分のうちに蔵している精神の美質を丹念に見るために、彼らにたまたま附着した土くれを洗い落す」ことが必要である、と彼は書いている。(全集、F.VIII)当時、人民大衆は打ちのめされ圧しひしがれていた。しかし、「地下にひそむ新しい端緒が、外部に溢れ出ようとする明白な決意をもつて、沸きたち、煮えたぎつてゐる。生活の昔ながらの流れは、この地下のこだまをかき消そうと努めている。容易ならぬ事態はまだ到来していないが、それが近いことはすべての人に認められている。」(全集、XVI. CTP. 447)

サルツィコフシチェードリンは、八〇年代の進歩的文学の指導者であり、その作品と人間自体が時代の知性と良心のシンボルであつた。彼が主宰した「祖国の記録」は、その周囲にもつとも先進的な作家・評論家を結集した。この雑誌は、終刊号まで革命的民主主義の原則と理念をもちつづけた。アレクサンドル三世の政府は若干の警告の後、一八八四年四月、この雑誌を発禁処分付した。だが、このことはシチェードリンの活動を封ずることにはならなかつた。『おとぎ話』その他の諷刺は、単行本出版でつづけられ、いつそう多くの読者に親しまれた。

人民派文学が生んだ最大の作家グレープ・ウスペーンスキイ(一八四三—一九〇二)の作家的活動も「祖国の記録」と緊密に結びついている。ウスペーンスキイは、人民派の出身ではあつたが、そのリアリスト作家としてのすぐ



れた天分によつて、ズラトヴラーツキイやナウーモフ等の人民派文学の限界をはるかに超え、思想的にもシチェードリンに、革命的民主主義に近づいている。

ウスペーンスキイの創作は、ほとんど農村生活に取材されている。彼の農民に対する態度は、革新的で、「ミール」や「オープシチナ」のような共同体の理想化や紛飾とは縁遠い。彼が描出した農村生活のリアルな姿は、この時期に進出した初期のロシヤ・マルキシストに多くのデータを与え、人民派との理論闘争に役立つた。ウスペーンスキイはシチェードリンと同様、農村における資本主義的關係の発生に着眼し、その過程を描き出した。とくに彼が『土地の力』（一八八〇）とともに、『資本の力』の創作を予定していたことは注目し得る。「ロシヤ報知」の編集者に宛てた手紙のなかで、彼はこう書いた、「問題は——私が目下すべきな着想にとりつかれていることです。この着想が私のなかでうまい具合に組立てられ、——調査され、秩序だてて整理されたロシヤ生活の諸現象を数多く私のなかにかき集め、吸いこんだのです。土地の力と同様、——つまり勤労する民衆の生活条件、その憎しみと善良さと同様、——私は目下、『資本の力』という一連のオーチュルキを書くかと熱望しています。……『資本の力』という表題がまづいとすれば、『資本の影響の記録』と名づけましょう。資本の影響は議論の余地がないまでに撃退しがたく、生活において避けがたい現象であると思われまゝ。現在、この現象は数字であらわされていますが、私の場合、正数と小数とが人間に換えられるわけです。この主題は私をがっしりした基盤に立たせまゝ。」（「ロシヤ報知」）

ウスペーンスキイにとつても、資本主義は避けがたい現象であると同時に「不潔なるもの」であつた。『資本の力』の創作は実現されなかつたが、その部分的肉化は『生きてゐる数字』（八八）に見られる。この記録小説のなかには飢餓の農村の戦慄すべき光景が示されているが、農民調査の詳細な資料における百分比がウスペーンスキイによつて具体的な、「生きてゐる数字」に移し換えられている。統計表の無味乾燥な数字は、——税金の重荷にあえぎ、残酷

で愚劣な役人たちに圧迫された貧農のみじめな生活、追放、負債、訴訟の悲劇、疫病、早魃、飢餓、民衆に対する民衆自身の村八分的迫害、民衆の無知と偏見、小暴君に成上つて農村に資本主義を導入する富農の残忍な手口の具体的形象に變つた。

ウスペーンスキイ自身は、その創作の対象として農村生活をもつぱら扱つていたが、当時の一般的風潮に影響されて大多数の作家は都会的小市民的文学の陣営に呑みこまれ、「百姓」の主題にはあまり注意を払わなかつた。このことがたえず彼を悲しませた。「祖国の記録」に彼は次のように、自分の不満を述べた。「気が向いたときにでも、諸君の手許にある印刷物をどれでも手にしてみたまえ。分厚な雑誌、薄手の雑誌から、大小の新聞から、百姓に関係のある部分を全部抜きとつてみたまえ。おそらく、諸君のもとには百姓にはいささかの関係もない資料が群がつて……（百姓に関係した資料は）なにかの記録の二、三十ページ分もあればいいほうだ。文明社会を研究している長篇小説散文の類なら何百ページもの大著がある……だが百姓を扱つた作品を指折つて数え上げてみたまえ、そうした作品の発行部数と、売切れるのに何年かかつたか調べてみたまえ。諸君は、そうした作品が文字どおり十指に満たず、五、六年かかつて二千冊そこそこ売れたことに気づくだらう。その五、六年の間に、「百姓ものでない」創作、翻訳文学、それにつづいて「娯楽」文学、「軽い読物」文学、なぐさみとくすぐりが——諸君のまわりで、日毎に、一足ごとになんと群りうごめくことか。」（「祖国の記録」1884. No. 2）

農村生活にもつと注意を向けようというウスペーンスキイの呼びかけは、当時の希望を失い、個人生活の小さい殻に閉じこもる小市民作家たちを奮い起たすことができなかつた。孤立の感覚がウスペーンスキイの八〇年代末期の作品には、かすかに滲み出ている。シチュードリンと同様、彼も「限りなく明るい未来」の信念をもちこたえていた。また彼は七〇年代後期にマルクスの学説を知り、『資本論』の著者を深く尊敬していた。しかしウスペーンスキイは

まだ萌芽的状态にある工場労働者のなかに「限りなく明るい未来」を創りだす創造的力を見てとるところまでは行かなかつた。

これらすべてのことは、この作家を悲劇的結末へと導いた。イェ・レートコフの回想記には、ウスペーンスキイのこの時代の苦悩の姿を物語っている。「だが人民の魂は荒廢している、荒廢しているのだ。どうして闘かおう？ そんな力があるだろうか？ 今のところ、私には見えない、見えない……」八〇年代末期以降のウスペーンスキイの書簡には、彼の精神の異常が次第に色濃く現われている。そして一八八九年、シチェードリンが倒れたその同じ年に、ウスペーンスキイは発狂の兆をみせ、三年後精神病院に入れられて、ほとんど正気に返ることなく、一九〇二年四月、息を引き取つた。

#### 四

フョードル・ドストエーフスキイはこの年代の初めにすでに世を去つたが（一八八一）、もう一人の巨人——レフ・トルストイ（一八二八—一九一〇）は依然健在で、その思想と芸術の最終的完成をめざして旺盛に活動していた。八〇年代はこの大作家の創造にとつてきわめて重大な意義をもつ。この時期、トルストイは芸術家としてよりは、はるかに熱心に道德再生の説教師として、宗教的哲学の創始者として行動した。この時期の彼の著作の大半は、原始キリスト教の本来の意味を探求し、彼が到達した思想を普及するための論文である。言うまでもなく、トルストイの宗教思想家、社会改良家としての活動はかなり初期から始められていた。しかし、この時期の彼は机上の思索とか農民の福利施設の建設といった手近な実践ばかりでなく、自分の哲学を積極的に宣伝し、政府に対してもしばしば革命的

な意見書を提出した。また教理に従つて自分の生活を変え、財産私有の否定がからんで妻と衝突したり、青年時代から愛していた狩猟を廃し、肉食を断ち、禁酒同盟を起し、禁煙を実行したのもこの時期である。

ロシア屈指の名門に生れたトルストイは、青年時代からすでに特権階級の「不正」に対する疑惑に悩んでいた。六〇年代にはすでに『戦争と平和』をはじめ一連の作品で世界的作家の地位を確立していたが、トルストイのなかではたえず生活に対する疑惑が波打ち、「罪」の意識がつきまとつていた。七〇年代なかばに訪れた精神的危機は、『懺悔』(七九―八二)のなかで書いたように、「これは生活ではなく、生活の模倣にすぎない」という結論に達し、自分の周囲の生活全体の否定となる。「生活を理解するためには、われわれ寄食者の生活ではなく、平凡な、勤労する人民の生活を——生命を与えるところの生活を理解しなければならぬ。」と彼は書いた。「そこで私は、素朴で、無学で貧しい人々に共通な生活を見守り、どの人も、私が無視し軽蔑してきた人生の意味を感じているのを発見した。理性に基づいた知識、すなわち学問のある人や賢い人たちの知識は、人生の意味を否定する。ところが、そのほかの大多数の民衆は、人生に意味を与えるところの、理性によらない生の意識をもっている。この理性によらぬ知識は信仰である……。」さらにトルストイは、彼の「案内者たる理性を棄て」ようとして、ながい内面の闘争をつづけるが、やがて「信仰は力であり、理性は生命のランプである」という確信に達する。ここから理性で受けつけることのできない教理を押しつける正教教会に対して、反旗をひるがえし、神学原典の研究・吟味が始まる。

(註) トルストイの精神的危機は『アンナ・カレーニナ』(七三―七六)執筆中に起つた。『懺悔』によると、一八七四年頃から奇妙な放心状態が彼の上に始まり、次第に嵩じて、彼はすっかり意気阻喪するようになる。彼には人生が目的を持たず、無意味に思われ、たえず「なぜ？」という問いを自分に発しては答を見出だせず苦悩していた。この状態は一八七九年にスターエフという単純な信仰に徹した百姓に会うまでつづく。トルストイの内的葛藤は『アンナ・カレーニ

ナ』のレーヴィンの形象において鮮明に描かれている。

『わが懺悔』を終えると、彼は次々と自分の宗教論を発表し、正教会に質問と批判とを浴びせかけた。ツァーリ政府の特別の保護のもとに安逸を貪つて、腐敗のきわみにあつた教会に対する彼の攻撃は、知識人社会に大きな感銘を与えずにいなかつた。「こんな風に生きるべきでない、こんな風に生きてはならない！」というトルストイの叫びは八〇年代全体を通じて、ロシアの隅々に拡がつていった。

宗教的探求を深める一方、トルストイは、偉大な抗議者としての旺盛な活動を行つていた。アレクサンドル二世暗殺に対する政府の報復——「人民の意志」派の指導者たちの処刑中止の歎願、民衆と諸民族に対する不正な圧迫への抗議、貧民街の生活の調査とその生活条件改善の意見書、私有財産廃止の意見書等々は大きな社会的反響を捲き起した。

トルストイにおいては社会改良の行動と宗教的理念とが完全に一致した。真理は、彼が理解しているキリスト教の解釈と一致し、そしてこのキリスト教の解釈の根本思想となつたのは、「悪に抗するなかれ」であつた。この立場から、トルストイは、政府を非難すると同時に、革命的インテリゲンツィヤの運動をも否定した。ロシアにおける二〇年にわたる革命闘争の経験を評価しつつ、彼は、若い有能なインテリゲンツィヤが真理のために闘い、自己犠牲の精神を発揮したことを認めた。しかし、「何をなしたか？ なんにもない！ なんにもないよりもつと悪いことだ！ 激しい精神の力を破滅させてしまつたのだ。」「銃撃や、爆発物や、印刷機のかわりに」、「キリストの教を信仰し、キリスト教徒の生活」を唯一の知的生活として是認せよ、と彼は呼びかけた。キリスト教徒の生活とは自己完成の道である、内面的「改造」と道德的完成であると彼は説く。「人間関係の改造は、個々の人間の生活条件の改造が実現

されるときにのみ可能である。」

八〇年代の反動期に、知識人が魂のよりどころを失つて深刻な精神的恐慌を経験していた時期に、トルストイが始めた説教は広汎な、多様な社会層から大きな関心を喚び起した。だがこの関心の向け方には、社会層や個人意識の差違によつて、複雑な要素があることを考慮しなければならぬ。一部の人々は、その関心の全部、もしくは少くともその主要な部分を、トルストイの発言の批判的・摘発的抗議の側面に向けた。また他の人々は当代随一の文豪の発言に盛られた倫理の問題にもつばら注目した。トルストイの発言の一つ一つは、知識人たちの間に活潑な論議を起した。そしてまもなく「トルストイ主義者」のグループが形成されはじめた。彼らは「悪への無抵抗」の説教を何より高く評価し、簡易生活、「自分の労働による」生活、道徳的自己完成を喧伝した。文豪の偉大な名を僭称することによつて、彼らは知識青年のサークルや、農民や、稀には労働者層の間にも支持者を見出していた。しかし彼らの大多数はトルストイの思想と行動の積極面をまったく無視し、もつばら消極的要素のみを伝道した。もちろん、真自みな、真に師匠に忠実な「トルストイ主義者」がまったく存在しなかつたのではないが、トルストイ自身でさえ、いわゆる一般に「トルストイ主義者」と称する者に対して少からず不快の気持を抱いていたという。

トルストイの思想についてここでは深く触れる余裕はないが、全体的にみて、無抵抗と個人の道徳的・自己完成の宣伝は、社会的政治的諸制度の変革の闘争に対立し、大衆のなかにひそむ革命的エネルギーを眠らせ、その結果として専制を擁護する役割を演じたと言わねばならない。八〇年代なかばから後半にかけて、出版界はこぞつて、トルストイ主義の問題を採りあげた。盲目的な心酔が雑誌を埋める一方、さまざまな角度からの反論が提出された。

すでに一八八五―八六年、人民派の古い指導者で国外に亡命中のペ・ラヴロフは、トルストイの教義の分析にさげられた論文『古い諸問題』を発表した。ラヴロフは、彼の言葉によれば、「わが偉大な文学者の教義において出

会うところの、矛盾する諸要素のなかから健康な、有益な要素を抽出すること」を、この論文の目的とした。しかし彼は、この教義の有害と思われる部分についても詳細に検討を加えた。「『悪への無抵抗』についての神祕的教義のなかから人生の真実の指導性を借りる可能性」を否定しながら、革命へ向かう「人間の権利」と「革命のために働く」義務とを彼は主張した。

ラヴローフの論文とほぼ同じ時期に、ロシアでもトルストイの教義に対する批判的論文が、ミハイロフスキによつて発表された。後者は地理的条件からもはるかに広汎な読者に読まれ、それゆえに非常に多数の共鳴者を得た。ミハイロフスキもまた、ラヴローフと同様、この教義の社会的根源を明らかにできず、それに対置すべき思想を充分には表現できなかった。彼自身の見解のなかにトルストイに近い要素があつた。——歴史の進行過程の無理解、資本主義の排斥、「自立的」小農経営と土地の共同体的所有、人民に対する「負債」の意識がそうである。しかしミハイロフスキは、トルストイの農民的世界観の前に盲目的跪拜をしたわけではなく、政治闘争の否定や無抵抗を受け入れたのではない。彼は無抵抗の説教のうちに「生活に対する煽動的な輕蔑」を見てとつた。それゆえ、トルストイ主義に対する批判者が各方面から登場している現象を、「文学魂が生存して」、「社会的痲痺と退嬰の説教」の敵が健在している証左として喜んだ。

トルストイ主義に対して組織的に挑戦したのは、エヌ・シェルグーノフである。彼は一八八七年から九一年まで——その生涯の最後の年まで、この闘いを進めた。「祖国の記録」閉鎖後、シェルグーノフは「ロシア思想」をおもな活動舞台にし、『ロシア生活概観』と題する一連の論文を発表した。この論文は大部分、トルストイ主義批判に向けられたものである。彼は、トルストイに対する反駁に関連して、とりわけ「モラリストとして」および「社会活動家として」のトルストイの観点の分裂の問題に大きな注意をはらつた。また、「個性」と「環境」の問題にも注視した。

シュルゲーノフは、政治の発達や社会関係の変革を達成するのは知的な、もしくは経済的な改善のみだろうか？と問う。そして、「社会悪に対しては社会的手段によつて闘うべきだ」と主張した。「新しい予言者」トルストイのあとに、弟子たちや追随者の「大群」が従うが、しかし彼らは「夢想者の宗派を形づくるのみであつて」「生活は彼らのあとにつづかない」（作品集、T.III. CTP. 520）とシュルゲーノフは結論した。

流刑地からヨーロッパ・ロシアに帰つたチュエルヌイシェーフスキイもまた、「ロシア思想」や「ロシア報知」に発表した一連の論文のなかで、「トルストイをスローガンとする運動」の一切が「滑稽至極」であるという態度を表明した。

八〇年代の初頭に創作活動を始めたチュエーホフは、トルストイの真摯な真理探求と信仰における偏見や迷信の打破に心を惹かれ、その教義に共感をもつていたが、しかしトルストイの実際的な結論を受け入れるのを拒み、「ヤースナヤ・ポリヤーナの賢人」が信者たちに課した行動の規準をしりぞけた。九〇年代以降にはチュエーホフはトルストイ主義の明らかな反対者となつた。<sup>(註)</sup>

(註) 青年時代のチュエーホフは「私はトルストイの信者ではない……だがすべての信仰のなかでは、トルストイの教義が私にもっとも近いように思われる」と書いた。しかし一八九四年のズヴァーリンあての手紙ではこう書いた。「トルストイの哲学は六、七年の間、私をとりこにした。しかし今は私のなかで何かが抗議する。理性と正義が私に告げる——人間性は純潔や肉断ちよりもむしろ電気と蒸気のなかにある、と」(全集、T. 16. CTP. 132—133)

チュエーホフよりすこし遅れて文学界に登場したコロレンコは、よきキリスト教徒として熱心な人道主義者としての立場から、芸術作品によつて「悪に抗するなかれ」の教義と闘つた。コロレンコの見解は、『フロールの伝説』(一



八八六)にとりわけ鮮明に示されている。ローマの支配に抗するユダヤ人の武装蜂起を主題としたこの小説は、ロシア社会の不正に憤激し、「人民の中へ」の運動に参加せずにおれなかつたコロレンコの、現実のロシアに生きる革命家の精神をもつて書かれたのである。

「悪への無抵抗」、その結果として専制への従順を意味するトルストイの教義に対する民主主義陣営の批判は、進歩に幻滅し個人生活に閉じこもるロシアの知識人たちに、ふたたび社会的な、実際の活動へと呼びかけ、科学への信頼を取り戻させた点で大きな役割をもつていた。トルストイ主義批判は、次代の世紀末と二〇世紀初頭において、レーニンによつて、ゴリキイによつて承継される。

X X X

八〇年代はロシア作家の新旧世代が大きく入れ代つた時代である。ロシア文学の黄金時代と云われる六、七〇年代の巨匠たち——ネクラソフ、ドストエーフスキイ、ツルゲーネフ、サルツイコフ、シチェードリン、チェルヌシキ、フスキイ——民主主義文学の発達に少なからぬ貢献をなした中堅作家たち——ピーセムスキイ、ポミヤロフスキイ、ニコライ・ウスペーンスキイ、ナドソンその他——がこの年代の初頭から末期にかけて、相次いで世を去つた。疑いなく巨大な才能を秘めていたガルシンは若くして精神錯乱に倒れ、グレープ・ウスペーンスキイもまた発狂によつて再起不能となつた。八〇年代の末において健在だつたのは、わずかにトルストイとレスコーフのみとなつた。

レフ・トルストイは思想と芸術の大きな矛盾をはらみながら、九〇年代へ巨人的歩を進めていつた。トルストイの教義には批判的に対しながら、その芸術の偉大な心理的写実主義の力を学びつつ、チェーホフとコロレンコがロシア・リアリズムの道を歩みつつける。しかしこの時代、群小作家の多くは批判的リアリズムの道をゆがめて、あるいは

は自然主義に墮し、あるいは「純粹芸術」に走つて、九〇年代のデカダン派を形成する。

八〇年代の末、チューホフとともに批判的リアリズムの究極的完成を押し進めつつ、その手法の限界が近づいていくことを予感し、コロレンコは「新しい芸術」について語る。たとえ現実が望ましい見透しを与えないとしても、芸術家は描写の正確さに留まらず、現実の画面のなかに希望を、夢を、予感をもちこまねばならぬ。そして古いロマンチズムを乗り越えるには、現実に対する積極的態度——大衆に根ざすヒロイズムの把握がなければならぬ、と彼は考へる。「われわれはヒロイズムを認めよう。そのときこそ、リアリズムとロマンチズムの統一シンテーゼのなかから、芸術文学の新しい方向が生まれるのだ。」(日記、T. I. СТР. 188)

コロレンコが期待した「芸術文学の新しい方向」は、やがて、彼の直接の教え子として登場するゴーリキイによつて、芸術至上主義やデカダン派、象徴派との闘争の過程を経て実現される。しかしそれはすでに、次の九〇年代に属する問題である。

附記 この小論文は主として次の書物を参考にして書かれた。

Академия наук СССР: История русской литературы, том IX, часть 1~2, изд.

АН СССР. Москва. 1956.

А. Волков: Очерки русской литературы конца XIX и начала XX века. Гослитиздат.  
Москва. 1955.

И. Груздев: Горький и его время, изд. «Советский писатель». Москва, 1948.